

檸檬

梶井基次郎

青空文庫

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終おさ圧えつけていた。焦しょうそう躁と言おうか、嫌悪と言おうか——酒を飲んだあとに宿ふつかよ酔があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかった。結果した肺はいせ尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせてもらいにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上がつてしまいたくなる。何か私を居いた堪たまらずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

何故なぜだかその頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが転がしてあつたりむさくるしい部屋が覗のぞいていたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕むしばんでやがて土に帰つてしまふ、と言つたような趣きのある街で、土塀どべいが崩れていたり家並が傾きかかつていたり——勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるような向日葵ひまわりがあつたりカンナが咲いて

いたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ今自分が来ているのだ——という錯覚を起こそうと努める。私は、できることなら京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行つてしまいたかった。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂い^{にお}のいい蚊帳^{かや}と糊^{のり}のよくきいた浴衣^{ゆかた}。そこで一月ほど何も思わず横になりたい。希^{ねが}わくはここがいつの間にかその市になつてゐるのだつたら。——錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。なんのことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

私はまたあの花火というやつが好きになつた。花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵具で赤や紫や黄や青や、さまざまの縞模様^{しまもよう}を持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠^{ねずみ}花火^{はなび}というのは一つずつ輪になつていて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心を唆^{そそ}つた。

それからまた、びいどろという色硝子^{ガラス}で鯛や花を打ち出してあるおはじきが好きになつたし、南京玉^{なんきんだま}が好きになつた。またそれを嘗^なめてみるのが私にとってなんともいえない

享樂だったのだ。あのびいどろの味ほど幽かすかな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなって落ち魄ぶれた私に蘇よみがえってくる故せいだろうか、まったくあの味には幽かすかな爽さわやかなんとなく詩美と言ったような味覚が漂って来る。

察しはつくだろうが私にはまるで金がなかった。とは言えそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰めるためには贅ぜいたく沢たくということが必要であった。二銭や三銭のもの——と言って贅沢なもの。美しいもの——と言って無気力な私の触角にむしろ媚こびて来るもの。——そう言ったものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕むしばまれていなかった以前私の好きであった所は、たとえば丸善であった。赤や黄のオードロンやオードキニン。洒落しやれた切子細工や典雅なココ趣味の浮模様を持つた琥珀色や翡翠ひすい色の香水こうすい壘びん。煙管きせる、小刀、石鹼せっけん、煙草たばこ。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあった。そして結局一等しい鉛筆を一本買うくらいの贅沢をするのだった。しかしここももうその頃の私にとっては重くるしい場所に過ぎなかった。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取りの亡霊のように私には見えるのだった。

ある朝——その頃私は甲の友達から乙の友達へというふうに友達の下宿を転々として暮

らしていたのだが——友達が学校へ出てしまったあとの空虚な空気のなかにぼつねんと一人取り残された。私はまたそこから彷徨い出なければならなかった。何か私を追い立てる。そして街から街へ、先に言ったような裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ち留まったり、乾物屋の乾蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、とうとう私は二条の方へ寺町を下り、その乾物屋で足を留めた。ここでちよつとその果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であった。そこは決して立派な店ではなかったのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な台の上に並べてあつて、その台というのも古びた黒い漆塗りの板だったように思える。何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴオリウムに凝り固まったというふうには果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆくほど堆高く積まれている。——実際あその人參葉の美しさなどは素晴しかった。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。

またその家の美しいのは夜だった。寺町通はいつたいに賑かな通りで——と言つて感じは東京や大阪よりはずつと澄んでいるが——飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出ている。それがどうしたわけかその店頭の前だけ妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条

通に接している街角になっているので、暗いのは当然であつたが、その隣家が寺町通にある家にもかかわらず暗かつたのが瞭然はつきりしない。しかしその家が暗くなかつたら、あんなにも私を誘惑するには至らなかつたと思う。もう一つはその家の打ち出した廂ひさしなのだが、その廂が眼深まぶかに冠つた帽子の廂のように——これは形容というよりも、「おや、あその店は帽子の廂をやけに下げているぞ」と思わせるほどなので、廂の上はこれも真暗なのだ。そう周囲が真暗なため、店頭に点けられた幾つもの電燈が驟雨しゅううのように浴びせかける絢爛らんらんは、周囲の何者にも奪われることなく、ほしいままにも美しい眺めが照らし出されているのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒らせんぼうをきりきり眼の中へ刺し込んでくる往来に立つて、また近所にある鎚屋かぎやの二階の硝子窓ガラスをすかして眺めたこの果物店の眺めほど、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀まれだつた。

その日私はいつになくその店で買物をした。というのはその店には珍しい檸檬れもんが出ていたのだ。檸檬などごくありふれている。がその店というのも見すばらしくはないまでもただあたりまえの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなかつた。いったい私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈たけの詰まつた紡錘形の恰好かっこうも。——結局私はそれを一

つだけ買うことにした。それから私はどこへどう歩いたのだろう。私は長い間街を歩いていた。始終私の心を圧えつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛ゆるんで来たどみえて、私は街の上で非常に幸福であった。あんなに執拗しつこかった憂鬱が、そんなもの一顆いっかで紛らされる——あるいは不審なことが、逆説的なほんとうであった。それにしても心というやつはなんと不可思議なやつだろう。

その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかった。その頃私は肺尖はいせんを悪くしていても身体に熱が出た。事実友達の誰だれかに私の熱を見せびらかすために手の握り合いなどをしてみるのだが、私の掌が誰のよりも熱かった。その熱い故せいだったのだろう、握っている掌から身内に浸み透つてゆくようなその冷たさは快いものだった。

私は何度も何度もその果実を鼻に持つていつては嗅かいでみた。その産地だというカリフォルニヤが想像に上つて来る。漢文で習った「売柑者之言」の中に書いてあった「鼻を撲うつ」という言葉が断きれぎれに浮かんで来る。そしてふかぶかと胸一杯に匂やかな空気を吸い込めば、ついぞ胸一杯に呼吸したことのなかつた私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇つて来てなんだか身内に元気が目覚めて来たのだった。……

実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が、ずっと昔からこればかり探していたのだ

と言いたくなつたほど私にしつくりしたなんて私は不思議に思える——それがあの頃のことなんだから。

私はもう往来を軽やかな昂奮に弾んで、一種誇りかな気持さえ感じながら、美的装束をして街を かつぽ 歩た詩人のことなど思い浮かべては歩いてゐた。汚れた手拭の上へ載せてみたりマントの上へあてがつてみたりして色の反映を はか 量つたり、またこんなことを思つたり、——つまりはこの重さなんだな。——

その重さこそ常 つね つね尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの重さはすべての善いものすべての美しいものを重量に換算して来た重さであるとか、思いあがった かいぎやくしん 諧謔、心からそんな馬鹿げたことを考えてみたり——なにがさて私は幸福だったのだ。

どこをどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前だった。平常あんなに避けていた丸善がその時の私にはやすやすと入れるように思えた。

「今日は ひと 一つ入つてみてやろう」そして私は かず はずかずか入つて行つた。

しかしどうしたことだろう、私の心を充たしていた幸福な感情はだんだん逃げていった。香水の壇にも煙管にも きせる 私 の 心はのしかかつてはゆかなかつた。憂鬱が立て こ 罩めて来る、私は歩き廻つた疲労が出て来たのだと思つた。私は画本の棚の前へ行つてみた。画集の重た

いのを取り出すのさえ常に増して力が要るな！　と思った。しかし私は一冊ずつ抜き出しではみる、そして開けてはみるのだが、克明にはぐってゆく気持はさらに湧いて来ない。しかも呪われたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでいて一度バラバラとやってみなくては気が済まないのだ。それ以上は堪らなくなつてそこへ置いてしまう。以前の位置へ戻すことさえできない。私は幾度もそれを繰り返した。とうとうおしまいには日頃から大好きだったアングルの 橙^{だいだい} 色^{いろ}の重い本までなおいつそうの堪^たえがたさのために置いてしまった。——なんとという呪われたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。私は憂鬱になつてしまつて、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に眼を晒^{さら}めつて後、さてあまりに尋常な周囲を見廻すときのあの変にそぐわない気持を、私は以前には好んで味わつていたものであつた。……

「あ、そうだそうだ」その時私は袂^{たもと}の中の檸檬^{れもん}を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。「そうだ」

私にまた先ほどの軽やかな昂奮が歸つて来た。私は手当たり次第に積みあげ、また慌^{あわただ}しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取り去つたりした。奇

怪な幻想的な城が、そのたびに赤くなったり青くなったりした。

やっとそれはでき上がった。そして軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬れもんを据えつけた。そしてそれは上出来だった。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかえていた。私は埃ほこりっぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

不意に第二のアイディアが起こった。その奇妙なくらみはむしろ私をぎよつとさせた。——それをそのままにしておいて私は、なに喰くわぬ顔をして外へ出る。——

私は変にくすぐつたい気持がした。「出て行こうかなあ。そうだ出て行こう」そして私はすたすた出て行つた。

変にくすぐつたい気持が街の上の私を微笑ほほえませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだつたらどんなにおもしろいだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰まりな丸善も粉葉こつばみじんだろう」そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩いろどっている京極を下つて行つた。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「青空 創刊号」青空社

1925（大正14）年1月

※表題は底本では、「檸檬《れもん》」となっています。

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.ujiyama

校正：野口英司

1998年8月31日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

檸檬

梶井基次郎

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>